

自分にとっては、雲の上以上の大先輩の先生の講演を聞く機会があった。話の中で、「阿下喜小学校には、石碑があるが、なんと書いてある？」と問われた。「阿下喜小学校には石碑はありません。」と答えると、「そんなことはない、“誠”と書いてある」と教えていただいた▼学校に戻って、教頭に尋ねると、石像の隣にあるじゃないですか。」と即答だった。「なんと書いてある？」と聞くと・・・・▼さっそく、確かめに行った。石像の横に、目立たぬようひっそりとたたずんでいた。昭和43年という刻印がある。まずは、大反省。面目ない。先生はこんなことを言われた「たくさんのお金をかけて、石碑をつくる。そこに刻んだ言葉は考えに考えた末に選んだ言葉なのだ。さまざまな思いが込められているはず」▼あらためて「誠」にこめられた願いに思いをはせる。多くの人が「誠」と言えば、新選組の誠を想像するかもしれない。教育現場での「誠」は、子どもにつけたい人としての在り様や心持ではないかと思った。50年以上の年月を経ても、輝きを失わない至宝の言葉だと思う▼誠実性は、非認知能力の一つでもある。これは温故知新と言ってよいのだろうか▼ある友人校長からは、「わが校には、石碑がなく凹んでいる」というメールをもらった。ちなみに、本日先生の講演会の演題は、「員弁の教育の不易と流行」。先生の真言にも出会えた。